

庄野潤三「愛撫」論

— 〈あたし〉の性的抑圧に着目して—

楊 琇 媚

はじめに

一九五〇年代、「第三の新人」と呼ばれる作家たちが次々と文壇に登場した。彼らの作品には、「家族」を主要テーマにするという共通点が見られる。「第三の新人」の一人である庄野潤三は、終戦と同時に復員し、中学校の教師として歴史を教えるかたわら、僅か三号で解散になった同人雑誌『光耀』（命名、伊東静雄）の刊行にも携わり、また創作活動にも励んでいた。『午前』や藤沢恒夫編集の『文学雑誌』での習作期を経て、昭和二十四年、島尾敏雄の推薦により、「文壇的処女作⁽¹⁾」と言われる「愛撫」を『新文学』（三・四月合併号）に発表し、その後、自身にとって初となる原稿依頼を同誌から受けたことによつて、文壇の注目を集めた。さらに、昭和二十九年の『群像』に掲載された「プールサイド小景」が第三十二回の芥川賞を受賞したこともあり、庄野は新進作家としての地位を文壇の中に固めていった。昭和四十八年以降、講談社から『庄野潤三全集』全十巻（昭四十八・六〜四十九・四）が刊行され、以後も多くの作品が発表されてきたが、彼の文学営為全般についての研究は、未だ途についたばかりという状況である⁽²⁾。

本稿で扱う「愛撫」（初出、昭和二十四年『新文学』三・四月合併号）は、昭和二十八年十二月に新潮社から刊行された庄野の第一創作集『愛撫』に収録された作品である。「『妻』を視点人物とする一人称の日記体がいられる⁽³⁾」この作品は、「夫であり、妻である」として『家庭』の存在に気づき、その意識をとおして『人生』に触れてゆくという、この作家の『夫婦小説』のいわば原型にあたるもの⁽⁴⁾として、「たしかな出発点となっている⁽⁵⁾」と評価されている。井上靖は「収録作品の中では『愛撫』が一番よくまとまっている。結婚したことで自分を見失った、結婚したばかりの若い人妻の特殊な心の内側が、繊細な筆で清潔に描かれている⁽⁶⁾」と述べている。また、山本健吉も「愛撫」を含めた夫婦小説について、「カメラ・アイが自由に妻と夫との間に受け渡しされるといふことは、私小説家のリゴリズムにあつては、ありえないことなのであるが、庄野氏のように、夫婦間の愛情に主題を限定し、陰陽の両極間に張りわたされた感情の微妙な反映のリズムを捉えようとする者には、きわめて効果的であり、作品に一種の自由な流露感を与えることにもなるのである⁽⁷⁾」と高い評価を与えている。ところがこの作品は、同時代評において概ね高い評価が下されたにもかかわらず、（その後のアカデミックな研究に限って言えば）阪田寛

夫による分析を除き、論及したものは全く皆無という状況にある。

しかし、その阪田の論考にしても、第一創作集『愛撫』に収録された八つの作品全般について論じたものであり、それぞれの作品の紹介や作品発表に至るまでの経緯をまとめることが論の主題となっており、作品自体に対する詳細な分析が行われているわけではない。そこで本稿では、語り手であり主人公である〈あたし〉⁹⁾の内面に生じた苦悩や動揺の描写に着目しつつ、〈あたし〉という人物像の内実の究明を試みてみたい。また同時に、Tやバイオリンの先生によって為された愛撫に対する〈あたし〉の反応や心情を明らかにすることによって、その愛撫という行為の構造の背後に含まれた意味を探っていくこととしたい。

一、〈あたし〉という人物像の内実

〈あたし〉は、「或るあまりばつとしない出版社へ勤めながら、そのかたわら、時々詩を作ってい」るといういわゆるサラリーマンの夫を持つ一般の主婦である。「女学校の四年生の三学期の初め」になつてから（戦時下という非常時であるにもかかわらず）、趣味でバイオリンを習い始めた、などという記述から言えば、中上流階層の家庭に育ったプチブル的女性であると推測される。

このような〈あたし〉は、かつて「スタンレー探検記を読んで感激し」、「ロビンフッドの物語を愛読し」、「ピーターパンになつて」¹⁰⁾「いつでも行きたいと思う場所へ飛んで行く」というような、情熱的で自由に憧れる、いわば夢見る少女であった。また、「あたしは自分

のことより外に考えなかった」という記述や、「あたしの前に立ち、あたしの心をとりこにする男の人のことを、どうして夢み、待つ必要があっただろう」という描写から分かるように、〈あたし〉は強い自己意識の持ち主であるように描かれている。ところが、このような〈あたし〉が、結婚によって「すっかり以前の自分を見失っていた」と言うのである。

あたしは夫を知ったことによって、自分を見失った。女学生の頃、あたしの身体に満ち溢れていた勇氣も憧憬も自信も、なにもかもがあたしから無くなってしまったのだ。あたしの、あたしだけがその中でオールマイティであった世界は、あの人によって崩壊してしまつた。あたしは心細さに震えながら、ただあの人胸にすがるより外なかつた。どうして、こんなになつたのか、あたしは今でも不思議に思う。あの人どこにあたしを根本的に変えてしまふ力が潜んでいたのか、あたしには分からない。気がついた時には、あたしはそんな情けない状態になつていた。（傍線引用者、以下同様）

引用が長くなつたが、この記述は〈あたし〉の心境をもっとも赤裸々かつ痛切に表現している箇所である。ここで注目したいのは、夫を知ることによって自分が激しく変化していったというその理由について、〈あたし〉自身、首をかき上げたり、不思議に思つたりしているという点である。

ところで、上野千鶴子によると、恋愛とは一種の「アイデンティテ

イ・ゲーム」であるという⁽¹⁰⁾。

自分とは異質な存在に対するこの相互依存性の認知を通じて獲得された相補的なアイデンティティを、性^{ジェンダー}アイデンティティと呼ぼう。性アイデンティティの獲得は、だから個体にとって痛苦に満ちたプロセスである。(中略)恋愛の中で、二者はアイデンティティの取り引きをする。(中略)このゲームは、不安定な天秤のように傾きやすい。

恋愛は結婚の延長線とも言われるが、本作品では二人が恋愛結婚なのかお見合い結婚なのか、はっきりと明示されてはいない。しかし、(あたし)が中上流階層の出身だという筆者の推測が正確であるとするれば、お見合い相手がばつとしない出版社に勤める人であったという可能性は低いだろう。また、自己意識の強い(あたし)が取り立てて特別な感情を持ってないような人と結婚をした、ということも考えにくく、いとと思われる。以上のことから言えば、(あたし)と夫がある程度の恋愛感情を持ったうえで結婚に至ったと考えるのが妥当な見方であるだろう。だが、(あたし)が結婚当初の自分を振り返って「一日中、何も仕事を手につかずに、ぼーっとして自分で自分のしていることが分からない。ただもうあの人のまわりを夢遊病者のようにうろろするしか能のないような私であった」と述べる箇所があることから、(あたし)は、恋愛というゲームの中では、自我を奪い取られたような、ある種の敗者であったことも同時に明らかとなる。となれば、ゲームの中のアイデンティティの取り引きが無意識に行われるものである以

上、おのずから(あたし)がなぜそこまで変わってしまったのかという問題について改めて考えてみる必要も出てくるだろう。

夢みる少女であった(あたし)はおそらく、ロマンティックな夢に つつまれたまま結婚生活に踏み切ったのであろう。しかし、現実の結婚生活では個性や生活態度の深層までも露呈されることになるだけに、(あたし)もまたそこで躓いてしまい、幻滅の悲哀や危機に見舞われてしまうことになったのだと想像することもできる。

(あたし)は夫のことを「世界中の誰もが持っていない美しいものを持っていて、かつ、才能のある人だという。しかし夫は、小説を書くと言いながら、少しも書かず、詩は書いていたものの、その詩も「ちつともよくない雑誌」に載るだけであった。そして、結婚して三年目に入ってから、(あたし)は「ようやくこの人の将来に疑惑を抱きかけ」、夫が「救い難い怠け者」だということに気付き始めた。次の引用を見てみよう。

すっかりこの人を見放す気持には到底なれないあたしであることは知っていたが、それでもこの人と結婚して以来の自分の生活――献身的な夫への奉仕と信頼というものが、不意にたとえようなく空漠とした感じを伴ってかえり見られる瞬間があった。

ここで(あたし)が結婚生活に幻滅した理由が、「うだつの上からない」夫にあると見ていることは明らかであろう。家庭という社会的に認められた女性の場所で(妻)となつた(あたし)は、安定と保護の享受と引き替えに自由と自我を放棄し、夫だけが頼りとなり生きが

いとなるような人生を選択することとなった。その夫に幻滅してしまえば、自分の結婚生活に対して漠然とした不安を感じるのも無理はないだろう。そう考えると、女性としての己を無にし、〈夫〉という他者のために生きるというイデオロギーの正当性に疑問を感じるようになった〈あたし〉は、そこから目覚めた存在であるかのようにも見えてくることになるだろう。しかし実際には、そうはならなかった。むしろ逆に空洞化されつつあった夫婦関係に、ある「転機」が訪れることとなったのである。

〈あたし〉が結婚生活に失望を覚え、再びバイオリンの稽古を始めた頃から、夫は「ぼんやりして」「何か考えている様子であった」り、毎晩、お酒を飲んで「魂を奪われた人のように帰って来」るようになる。そんな夫を見て、〈あたし〉は「歯痒くてならなかった」。そして、ある日の夜、夫は泥酔して帰ってきて、玄關前に倒れてしまい、そこで「意外な告白をした」。それは、会社から預かった印税を使い込んでしまい、その金を工面しようとして焦っているうちに、使い込んだことが発覚しそうになっているということであった。すると、それを聞いた〈あたし〉は「不意に胸の中のものもやがすつ飛んで、冬の青空のように心が晴れるのを感じ」、〈あたしは猛烈にあの人が愛しくなるのを覚えた〉のである。

本来、過ちを犯した夫に対して妻は責め立ててもよいはずであるが、しかし作品では、逆にこの事件により、〈あたし〉の夫への愛情が確たるものとなり、破綻をきたした夫婦の関係も修復される方向へと進んでいくのである。さらに、バイオリンの先生によって為された愛撫の話が聞かされた夫は、「まるで別人のように生き生きして、あたし

を質問攻めにした」。毎晩のように、「同じ質問がさまざまに形を変えて」為されることに、〈あたし〉は「興覚めた顔になっていた」ものの、「あの人がこのような情熱を示すことを嬉しく感じている自分に気が附いて」もいた。そして庄野は、「それを意識すると、〈ああ、あたしは何てつまらない『妻』になったんだろう。こう云う風にして、あたしは人生を送ってゆくのだなあ」と云う気持がしみじみと沸いて来るのだ。その気持は、やっぱり少し淋しかったと〈あたし〉に言わせ、作品を締めくくるのである。

前にも触れたように、妻が結婚によって、自分を見失ったというのがこの作品に対する一般的な読みである。前述した〈あたし〉の告白を見る限り、そういった読みは確かに成り立つだろう。ここで特筆すべきは、結婚生活がもたらした失望により、〈あたし〉が「人生の計算間違いをしていた」ことに気付き、あたかも婚姻そのものの真相を悟ったかのように語られている点である。もしも、このまま〈あたし〉が夫との従属関係から自由になり、そして個人になろうとしたならば、〈あたし〉を「新しい女」として高く評価すべきであっただろう。しかし作品の結末に、〈あたし〉が夫の「質問攻め」に対して「情熱を示」し、そのことを「嬉しく感じている」と描写していることから見れば、結局〈あたし〉の存在価値は再び夫婦の従属関係へと還元されてしまったと言わざるを得ない。大井正は「嫉妬とは、愛、性愛における心理的な競合に根をおくだけではない。それには、社会的な『權威』¹⁰²が要因となっていることを避けることができない」と指摘している。¹⁰² 〈あたし〉を「質問攻め」にした夫の行為は、バイオリンの先生に対する「嫉妬」に起因するものだと考えられ、このような行為の背

後にもまた、夫としての「権威」が潜んでいるのだ、とも考えられる。しかしながら、妻の（あたし）には隠蔽された夫の「権威」を見抜くことはできなかった。結局のところ、（あたし）には、夫の「権威」のもとで、妻という「社会的な地位」に安住することにより人生を送っていく、という以外に選択肢はなかったのである。

二、愛撫行為に見られる（あたし）の性的抑圧

二一（二）Tから受けた愛撫について

女学校時代に（あたし）は「一番仲良しの友達であった」Tと「同性間の愛情」があった。そして、（あたし）はいいやながらも、夫に責め立てられつつ、かつて修学旅行で宿屋に泊まった夜に、（ただ一度だけ）Tに抱かれたことを告白した。すると、夫は「まるであなたの結婚前の秘密の恋人を見つけたか何ぞのように、すっかり興奮してしま」い、「しつこく大騒ぎして、問い糺そうと」した。

このようにTに抱かれたことを告白したことによる夫の異常な反応から、またTとの関係が「同性間の愛情」であると敢えて断られていることから見れば、二人の関係が単なる友情という次元に留まるものではなく、同性愛の関係であったことはつきりする。¹³赤枝香奈子は、女学校における女性同士の親密な関係についてこう論じる——「女学校という血縁や地縁から切り離された場においては、女性たちは『娘』ではなく、『女学生』あるいは『少女』になり、同性間の比較的対等な関係性の中で、親密な関係を築くことが可能とな」っており、「女学校という制度が近代日本に登場して以降、そこで育まれる同性との

親密な関係が少なからぬ数の女学生たちを魅了し続けた」のだと。¹⁴つまり、女学校という場においては、女学生同士の間に親密な関係が生起することは、比較的良好に見られる現象であったというわけである。しかし、一方で、（あたし）はかつてのTとの関係について、次のようにも語っている。

あたしは本当はTさんのことは、あの人には話したくなかった。結婚式の時にも招待したし、女学校を卒業する時に一番仲良しの友達であったことだけは、それまでにも話してあった。だけど、どういう風な径路で二人が親しくなり、どんな風な交渉があったかと云うことまで、つまり女学校時代にだけ存在するあのクラスエスと呼ぶ特殊な同性間の愛情について、夫には話したくなかった。（中略）結婚してしまった今日では夫にもまた他のどんな人にも云わないで、思い出として自分の心の引き出しの中に封じこめて置きたかった。

むろん、夫にTが女学校時代の一番の親友だったことだけを話し、それ以上のことを語ろうとしなかったその理由は、一度Tに「抱かれた」という秘密にあったのだと思われるのだが、女性間の同性愛を社会的禁忌と見る眼差しが（あたし）の中にも内面化されていたという要因もそこでは働いていたと思われる。では、この「（ただ一度だけ）Tに抱かれた」という愛撫行為の背後にはどんな意味が込められているのだろうか。Tの愛撫を受けた（あたし）の心情が綴られた以下の記述を見てみよう。

- a. あたしは、何か非常にいけないことをしていると云う意識が頭から離れず、Tさんの顔を見ないで、眼をつむったまま抱かれていた。(中略) 次の朝、目を覚ましてから、あたしはTさんの顔もNさん(バイオリンの先生を紹介してくれた(あたし)を好いている同校の友達―引用者注)の顔も他の親しいグループのお友達顔も、まともに見られないような気持ちでした。(中略) あたしは、Tさんの男のような太い声を聞くと、癢に障って仕方なかった。二人だけの秘密を作ってしまったこと、それをTさんの中で満足していて、表面ではさり気ない様子をしているのが、憎らしかった。あたしが抱かれたまま、幸福に震える小鬼のような姿態でいたことが、取返しのないことのような気がしてならなかった。しかし、事実、あの何秒かの間は、そうであったのだ。あたしはぼーっとしていた。その時の気持がまざまざと思ひ出されて来るだけ、余計あたしは腹立たしく悲しくて、次の日は一日中、Tさんが何を話しかけても、少しも返事をして上げなかった、外のお友達が変に思うくらい。
- b. この時は雰囲気も何もなく、ただ行為だけがあつた。あたしはこの時、はつきりと何かを意識した。そして相手が同性であるだけに、余計その意識が鋭く来た。恥かしいことをしていると云う感じが、時の刻みの一瞬一瞬ごとに重く、あたしの胸を通過した。

ここで留意すべきは、「あたし」とTとの愛撫行為の一部始終を聞いた後、夫が中学生の時に見た蛇の交尾のことを思い出したと言っていることである。夫は「このたったの一度だけ見た蛇の交尾は、おれの頭の中に奇妙に感覚的な印象を残したが、きょうお前の話を聞いた時――つまりTがお前の肩に手をかけたまま、抱きしめもしないで、じっとしていたというところを聞いて、おれはその時の蛇の姿勢を思い出した」というように、二つの出来事を関連付けようとする。つまり、「あたし」とTとの愛撫の行為は単なる親密行為に留まらず、そこに性的要素が含まれていたことが示唆されているのである。さらに言えば、Tの愛撫が、蕾が綻びるような少女であり良家の子女であった(あたし)に、性的な目覚めを起こさせたのだとも考えられる。そのため、上の引用に見られる「あたし」の心情は、罪悪感、幸福感、羞恥心、懊悩などのさまざまな情緒が交錯したものであり、「あたし」はいかにも秘かに性的関係を交わし、婦徳や女徳から踏み外した少女であるかのように描写されているのである。

川村邦光は、ゼームス・アストンの『造化機論』(明治八年)で論じられている女性のセクシュアリティについて、次のように説明している。⁽¹⁾

女性の性的欲望の淡泊さを強調する一方で、女性が受動的で、感情的・情緒的であり、理性的ではなく、倫理的に無能でコントロールしやすい存在、さらにいえば玩弄物的^{がんでんぶつ}あるいは「娼婦」的存在とするのである。

「あたし」はTの「こっちへいらつしやい」という低い声を聞くと、「魔法にかけられたように、身体をねじらしてTさんの方へ近寄ろうとした」。ここでは、「あたし」は受動的で、コントロールしやすすい女性として描かれている。また、「何か非常にいけないことをしていると云う意識」が「あたし」の頭から離れないというところは、「あたし」が倫理的な配慮をしているということの意味するものであるだろう。そして、あたしがTに抱かれた時にとった「幸福に震える小鬼のような姿態」は、威厳を持った家長のような人物に対する際に典型的現れる姿態であるようにも見られる。¹⁶このように見れば、「あたし」はTにとってやはり「玩弄物」的存在であつたと見ることもできる。

このように、引用部分に見られる「あたし」の心情には、女性のセクシュアリティに関する様々な差別的言説が刷り込まれていることが分かる。そうした意味では、引用のb.に「あたしはこの時、はつきりと何かを意識した」とあるが、その意識が、「性的欲望」であるのも明らかである。また、「あたし」の内心にある「セクシュアル・アイデンティティ」が作用しているため、「相手が同性であるだけに、余計その意識が鋭く」感覺されたのだと考えることもできる。ところが、Tの愛撫によって「あたし」の「性的欲望」は誘発されたものの、結局のところ、それは「罪悪感」として収斂されることになったのである。¹⁷Tとの愛撫行為が蛇の交尾に擬えられた話を聞いて、「あたし」は「まるでフェンシングの細いしなやかな剣先で、胸を発止と刺されたように感じ」ているのだが、そのように心が大きく傷つけられたというのもそのためであろう。このように見てくると、Tとの愛撫行為の背後には、まだいとけない一人の少女であつたはずの「あたし」の

中にも性的抑圧が存在していたのだ、ということが示唆されているのである。

二―(二) バイオリンの先生である秋築先生から受けた愛撫について

「あたし」は、無意味で空虚な結婚生活を送っていることに気付きながらも、もはやなす術はないと感じていた。そんなときに、「不意に、ヴァイオリンを習いに行こう、と云う考えが頭の中に閃いて、四年ぶりに稽古を再開し、「秋築先生の門を潜ることになった」。稽古の始めは、「予想した通り、すっかり指の動かし方から忘れてしまっていた」が、先生が優しく指導してくれたおかげで、「あたしは久しぶりに心に生甲斐のようなものを感じ」た。ところが、「思いがけないものがあたしを待っていた」。

二回目の稽古に先生の家へ行くと、奥さんは留守だった。そのせいもあるのか、先生が「あたしに接する動作にしても物の言い方にしても何処となしに、たしかにちよつと違っていた」。稽古の前に、いつもの通り火鉢に手をかざすと、先生は「両方の手ですつとあたしの指を握った」。「あたしははつとしたけれども、手を引っこめる時機は一瞬に過ぎ去つたことを感じた」。自分が手を振り払わなかったことに対して、自分自身も「後で不思議に思った」ぐらいであった。そして、先生は最初は「ちよつとこわごわ握つたと云う感じの握り方であつた」が、「今度は両方の指であたしの指をいじくり始め」、「やわらかく指をからませて、あたしの指を一本一本持ち上げたり伸ばしたり」した。「あたし」は結局手を引っこめたが、「先生のやわらかく温かい指の感触が、あとに残つた」。「それは帰りの道を歩いている

時にも、まだ指のあたりにこびりついているように思えた」。このあたりの描写から窺えるように、先生の愛撫が（あたし）の内心ですでに微かな波紋を引き起こし始めていたのは明らかであった。

そして、稽古を始めてからも、先生が（あたし）の肘を触ったり手を動かしたりする時、「何だかその触れ方に意識的なものを感じられた」。いつもの通りの指導ではあるのだが、「今日はどうしてか、先生があたしの身体はどこか一部分に触れる時に、いちいちびったりと或る感じを伴うのであった」と、心の波紋は一段と広がっていった。三回目の稽古の時も、同じことが行われた。そしてこの時の（あたし）の心境がこう綴られている。

先生の指はあつたかかった。それが何か感情的なあつたかさであった。あたしは、指の温かさから、（先生はあたしが好きでたまらないのだ）と感じた。指を相手の自由にまかせている間、あたしの頭の中にあつたことは、この前のように、（今、不意に誰かがこの部屋へ入って来たらどうしよう？）と云うことであった。それは、あたしがいま秘密のことをしている、いけない事をしてしていると云う意識であった。既に、火鉢に手をかざすことは、先生に指を愛撫せられることをあたしが許していることを意味するようになっていた。そしてその事は、先生とあたしと二人の間だけの暗黙の約束のようになってしまっていたのだ。つまり、あたしが椅子に腰かけて火鉢の上に手をさし出す動作は、あたし自身は手があつたためようと云う気持だけのことなだけで、その動作の中にはもはや次に起るべき愛撫を認め、それを予期している

ものが含まれているのであった。（中略）あたしは少し頬が赤らむのを感じている。だけど、気持は比較的落着いている。その気持の底で、（あたしはいけないことをしている）と考えている。

（しかし、この時の気持は、ただいけないことをしていると云う罪の意識だけでないことが、後で夫の執拗な質問によって分かった）

ながながと引用したが、先生に愛撫されている時の（あたし）の気が非常にリアルに描かれている。最初は先生の挙動に驚きを見せてはいたが、しかし（あたし）はそれを拒否する態度を示さず、かえってされるがままになっていた。そこには、先生の指の感触に愛着を感じるようになった（あたし）がいた。そして、その感触は愛撫の回数が増えるにつれて、「先生はあたしが好きでたまらない」という「情感的」なものと感じるようになっていた。それと同時に、（あたし）は「いけない事をしている」ような罪悪感を覚えてもいた。しかしその後、上の引用にもあるように、（あたし）の火鉢の上に手を差し出す動作の中には「もはや次に起るべき愛撫を認め、それを予期しているものが含まれて」おり、そこには能動的な自分があることと見取れるようにもなっていた。

「愛撫」とは、文字通り、愛でながら撫でる愛情表現の一つであり、二人の人間が肉体的な接触をする親密行為である。むろん、人妻である（あたし）と異性である先生との間に愛撫行為が生じたことは、道徳上許されないことではある。それゆえ、（あたし）の中に生まれた罪悪感が、まさにその点に由来するものであったことは言うまでもな

い。ところで、先生による〈あたし〉へのボディータッチを「愛撫」として受け止め、またその愛撫を受け容れるような態度さえも見せていたとはいえ、〈あたし〉は果たして先生にどのような感情を抱いていたのだろうか。

四回目の稽古（作品では「三回目」となっているが、作者の計算違い）でも、稽古が始まる前に、先生は相変わらず火鉢にかざされた〈あたし〉の指を愛撫している。そして、稽古が始まると、先生はいままでには見られなかったほどの「積極性」をもって、〈あたし〉の肩を抱こうとしたり、「右手をあたしの腰のところへ廻して抱き寄せよう」としたりした。これに対して、〈あたし〉は「（いや！）」と云って、身体をねじらせるようにして、避けた。その手を強く払い除けた。拒否することによって、拒否する態度を強く見せている。さらに、先生に襲われないかという恐怖心や警戒心まで出来るようになった。ちなみに、その後、先生からのしつこい映画や食事の誘いに対して〈あたし〉はきっぱりと断ったし、先生のことを「夫に隠して一緒に映画を見に行こうと云う気持をあたしに起させるには、魅力の乏しい相手」だと認識し、「この先生と一緒に肩を並べて、どこかを歩くなんて、想像しただけでもふき出したくなる」と思ったりもした。このようにみると、〈あたし〉の心の底には先生に対する気持は好意的なものばかりではなく、嫌悪感すらも存在していたことが分かる。では、なぜ〈あたし〉は一方で「先生の指でするさまざまな愛撫から受けるその感触を快いと感じ、そのような愛撫を嬉しく思」えたのであるのか。言ってみれば、先生が、敢えて妻の留守の間に、稽古の指導という便宜を利用することで、〈あたし〉の身体のいろいろなところを触る

うとしたというその動機は、決して単純なものであったとは考えられない。作品では、先生の意志がいかなるものかは表明されてはいないが、おそらく〈あたし〉が意識していた通り、その行為に私情が込められていたのは間違いないだろう。さらに言えば、それは性的親密性への誘いを伴う行為であったとも考えられる。先生が〈あたし〉に対して、指―肩―腰の順で性器の近辺へと進むようにさまざまな愛撫を行っているということがそれを裏付けるものとなるだろう。このように考えれば、先生の愛撫から受ける感触を心地よいものと感じ、そのような愛撫を嬉しく思う気持になれたのは、先生から送られてきた性的なサインを〈あたし〉が確かに読み取れたからに他ならない。

〈あたし〉が結婚生活に失望し、夫との間にもさまざまな夫婦問題を抱えていたことは前節で述べた通りである。希薄な夫婦関係の中で、〈あたし〉は夫との性的関係に満足はしていなかったと推察される。換言すれば、先生からのさまざまな愛撫行為は〈あたし〉の性的欲望を誘発するものであったはずである。そして、夫との体のコミュニケーションをうまく取れない〈あたし〉にとって、先生の愛撫はいわば一種の補償作用であったのである。

ところが、先生の愛撫を受けている時の〈あたし〉は無意識にその欲望を抑えようとしている。なぜなら、先生の愛撫を受けている時の〈あたし〉は気持より罪悪感が先行しており、先生が〈あたし〉の肩や腰に触れた時、〈あたし〉は拒絶する態度を見せているからである。また、〈あたし〉が先生の愛撫を受けている時の気持は、罪の意識以外に、嬉しく思う気持もあったのだが、そのことが、夫の執拗な質問を通じてはじめて暴露されたというのもその理由の一つであったと考

えられる。

つまり、〈あたし〉の性的抑圧は、同性であるTとの愛撫行為においても、また異性である先生との愛撫行為においても、同様の図式の中に見出すことができるのである。

おわりに

以上のように、主人公の〈あたし〉が直面した夫婦の問題を手掛かりに、〈あたし〉の人物像の内実を明らかにした。〈あたし〉は結婚したことで自我を失ったと自覚し、従来の夫との間の従属関係に疑問を抱いていたものの、夫の「質問攻め」を「情熱」と見なすことにより、結局もとの夫婦の従属関係へと回帰する結果となった。また、〈あたし〉とTや秋築先生との愛撫の様子を語る様々な〈あたし〉の心情を分析した結果、〈あたし〉の中に性的抑圧が潜在していることも明らかになった。

敗戦に伴う戦後のスタートは、家族の解体に向けての画期的な第一歩ともなった。敗戦は、家長という役割を担ってきた男性たちの敗北を意味してもおり、有名無実化したの「家」のもとで耐えてきた女性たちは、民主主義によってもたらされた「男女同権」の理念によって自立性や自我を追求し始めた。〈あたし〉はまさしくそのような時代背景の中で造形された人物である。しかし、長い間家族イデオロギーを植え付けられてきた女性たちにとって、そうしたイデオロギーから解放されることは容易なことではなかった。そうであるがゆえに、「愛撫」はその困難さをまざまざと示す作品となっているのである。

ところで、作品の最後で、〈あたし〉が語った、「(ああ、あたしは何てつまらない《妻》になったんだろう。こう云う風にして、あたしは人生を送ってゆくのだなあ)と云う気持がしみじみと沸いて来るのだ。その気持は、やっぱり少し淋しかった)」という言葉は興味深いものである。それは、一見庄野のユーモアかつアイロニーを含んだ発言であるかのようにも見て取れる。しかし、先にも述べたように、会社の金を使い込んだ夫に対して、〈あたし〉は夫をとがめるどころか、かえってこの事件によって夫への愛情が確認された、と描写されていることから言えば、この描写それ自体、庄野自身がこのような理想的な妻のイメージを期待していることを意味しているようにも見える。このように見ると、上述した発言には実際のところ、庄野の矛盾した気持ちが込められているようにも思われるのである。

それでは、果たして、庄野自身、作品における〈あたし〉の性的抑圧の構造を見抜くことができたのであろうか。前に挙げた男性批評家の評論から見れば、答えはおそらく自明であろう。

つまり、作者庄野を含めて、男性批評家たちが目を向けたのは、あくまでも「夫に骨抜きにされた女性の淋しさ」や「若い人妻の心理描写」といった〈あたし〉の心理的な葛藤であり、〈あたし〉の性的抑圧はいとも簡単に看過されてしまっているとも見られるのである。ちなみに、Tの愛撫によって〈あたし〉の内心に罪悪感、羞恥心が芽生えたという先述の描写は、作者自身が同性愛をタブー視していたことを意味するものでもあるだろう。このように、作品に隠された〈あたし〉の性的抑圧の構造を浮き彫りにすることによって、庄野という作家の中にある「男性」という限界もまた同時に露出することとなるの

である。

*テキストの引用は講談社版『庄野潤三全集第一巻』（昭和四十八年六月）による。

注

- (1) 助川徳是「庄野潤三の人と作品」（『鑑賞日本現代文学29』角川書店 昭和五十八年十月）
- (2) 庄野潤三の全集が刊行されるまでの創作全般について言及した唯一の論著として、阪田寛夫『庄野潤三ノート』（冬樹社、昭和五十年五月）がある。全集刊行以後、その創作について全般的に論じたものは目下のところ皆無である。
- (3) 谷川充美「庄野潤三の作品における『樹木』と作家の転機―『夫婦小説』から『夕べの雲』まで―」（『日本近代文学』平成二十一年五月）
- (4) 保昌正夫「戦後の作家 庄野潤三」（『国文学解釈と鑑賞』昭和四十五年一月）
- (5) 井上靖「『愛撫』」（『婦人公論』昭和二十九年三月、引用は『井上全集 第24巻』（新潮社、平成九年七月）による。）
- (6) 山本健吉「書評『愛撫』」（『文学界』昭和二十九年三月）。なお、旧字体は新字体に改めた。
- (7) ほかに、「庄野氏の小説は現代の新人のだれの小説よりきめがこまかく、動きが繊細で、人肌と人の心の微妙な感触を味わはせる」という寺田透の評価が挙げられる。（寺田透「共通な喜劇的才能」『図書新聞』昭和二十九年二月六日）
- (8) 注2に同じ

- (9) 「あたし」は中性的一人称代名詞である「わたし」や「わたしく」に比して、女性により多く用いられる、女性的特徴を持つ代名詞として理解されている（金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店、平成十五年一月）。また、「あたし」という自称詞は、話し手が「自分らしさ」を主張するために、敢えて意図的に使用されることがあるという指摘もあり（山田正子・山田蘭子「『あたし』考」『目白大学人文学研究』平成二十年）、同論考では、「あたし」には、甘え、可愛らしさ、親近感、感情の吐露などのイメージが含まれており、女性語として時には「女性のありのままの素直さ」を表す働きを持つことが指摘されている。したがって、庄野が女性一人称の語り手として敢えて仮名を用いて「あたし」と表記していることにも相応の意味があると考えられ、それは、のちに詳しく考察するように、語り手が本来持っているはずの自分らしさ、素直さなどのキャラクターをより効果的に引き出そうという意図が働いていたと考えられるのである。
- (10) 上野千鶴子「対幻想論」（『女という快楽』勁草書房、昭和六十一年十一月）
- (11) この点は、結婚してまもなくの夫が（あたし）とTとの同性愛的な愛撫に強い興味をもち、執拗に責め立てたことに対して、（あたし）が当初それを夫の強い愛情表現と見ていたことと相同する。
- (12) 大井正『性と婚姻のきしみ』（福村出版株式会社、昭和五十五年十月）
- (13) 夫によるが（あたし）への激しい追究という態度には、この同性愛が同時に家父長制的秩序と密接に関係するものであることが仄めかされているようにも思われる。というのは、「家父長制は男権の下に再生産のプロセスを支配するメカニズムであるから、女性が性的に男性の支配下

に入らないレズビアンは、家父長制にとって不利益をもたらす」（中村三春「レズビアン——谷崎潤一郎『卍』／松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』」『国文学 解釈と教材の研究（境界を越えて 恋愛のキーワード集）』平成十三年二月）からである。

(14) 赤枝香奈子『近代日本における女同士の親密な関係』（角川学芸出版、平成二十三年二月）

(15) 川村邦光『性家族の誕生』（筑摩書房、平成十六年七月）

(16) 「幸福に震える小鬼」という描写には、〈あたし〉の可愛らしさを強調するような作用があるが、ここでも、〈あたし〉は「あたし」という自称詞を持つイメージにふさわしい女性的人物として描かれていることが注意される。ちなみに、可愛らしくて女性らしい〈あたし〉とは対照的に、Tが「男のような太い声」により「男性化」されていることもはっきりする。

(17) 〈あたし〉の中に、性欲や性を忌まわしいもの、汚らわしいものとする言説が根強く植え付けられてきたためと見なすこともできる。

(18) 坂西志保「週刊図書館」（「妻と恋人 庄野潤三『愛撫』」）（『週刊朝日』昭和二十九年一月二十四日）

付記 本稿は二〇一三年文藻外国語大学日本研究国際シンポジウム「日本語教育と日本研究の連携」（二〇一三年十月二十六日 於台湾・高雄）における発表内容に加筆・訂正を施したものである。

（よう しゅうび、台湾南台科技大学助理教授）